

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 11 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23614023

研究課題名(和文) グローバル観光の原初的形態としてのヒルステーションに関する総合的研究

研究課題名(英文) Hill Station: An Archetype of Highland Resort and Global Tourism

研究代表者

稲垣 勉 (INAGAKI, Tsutomu)

立教大学・観光学部・教授

研究者番号：10151573

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,200,000円、(間接経費) 1,260,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、宗主国によって植民地に建設された避暑地・ヒルステーションの現状を、領域横断的なアプローチで明らかにすることである。ヒルステーションはレジャーを通じた国際間の文化接触の先駆けであり、現在でも観光地として機能し続けている。リゾートの祖型のひとつであるヒルステーションの現状分析を通じて、新興国民国家における国内観光の社会的役割を明確化し、さらにグローバル化の下における、気候条件やより良い生活環境を求める「人の移動」を分析することで、ヒルステーションの現代的な意義を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：An aim of this research is to clarifying current situation of hill stations that were constructed by the suzerain in the colony as highland resorts. Hill stations were places of cultural contact in a context of leisure life, and are functioning as tourist destinations even today. By the research into the current situation of hill station, which is one of archetypes of highland resorts, a social role of domestic tourism in a new nation state, have been clarified. In addition, the research clarified a modern meaning of hill station through a survey on amenity migration under global context.

研究分野：時限

科研費の分科・細目：観光学

キーワード：国際研究者交流 ベトナム；マレーシア；カンボジア ヒルステーション 観光のグローバル化 人の移動 ポストコロナル

1. 研究開始当初の背景

研究対象とするヒルステーションとは、植民地期に宗主国が植民地、特にアジアの山間部に開発した山岳都市である。当初の地政学・軍事的目的から、次第に冷涼な気候を利用した避暑地としての性格が強まり、植民者の避暑・社交の場、子弟の教育の場としてレジャーを中心とする文化的空間に転化していった。ヒルステーションは観光が国境を越えて広がり、文化間接触が生じた最初の重要な事例である。現在でもヒルステーションの多くは戦後独立した旧植民地において、主要な観光地として機能しており、「ノスタルジー」に惹かれる旧宗主国からの観光客に加え、文化混淆の結果生じた西欧的な景観から国内観光客も多く来訪し、観光を通じた独特なグローバル空間が形成されている。ことに近年は経済発展とそれにとまなう途上国における国内観光の急速な成長にとまなう、ヒルステーションを訪れる観光客の主体が、旧宗主国の観光客から国内観光客へと変化し、それにとまなうヒルステーションの性格も変化しつつある。さら近年ではマレーシアのキャメロン・ハイランドのように、わが国からの定年後長期滞在者の受け皿となる事例も生じている。観光史、余暇史上の重要性のみならず、急速にグローバル化する現代観光という視点から見ると、ヒルステーションは観光を通じてポストコロニアル状況が現出する、きわめて示唆に富んだ研究対象である。

2. 研究の目的

本研究は上記の通り、植民地期に形成され、観光・レジャーを通じて国際間の文化接触の先駆けとなり、現在でも観光地として機能し続けているヒルステーションの現状を、領域横断的なアプローチで明らかにすることであった。具体的にはヒルステーションの新興国民国家における位置づけの明確化、現代観光に残る植民地期の影響の分析を通じて、急

速なグローバル化の下で、「人の移動」「文化接触」の様態としての観光とポストコロニアル状況との関係を明らかにすることが出来ると考えた。具体的な研究の重点項目は以下の通りである。

- (1) 議論の一般性を確保するための調査事例の増強
- (2) 都市計画的分析、空間分析の精緻化
- (3) 日本、中国など植民地以外に成立した疑似西欧的景観を持つ避暑地への分析の拡張
- (4) グローバル化などヒルステーションの置かれた現状に対する社会科学的分析の精緻化

3. 研究の方法

本申請研究は海外対象地における聞き取り、観察をもとにヒルステーションの現状を把握し、文献を用いて補強するという、典型的な社会科学的フィールドスタディである。研究に携わる人数が限られるため、年度毎に対象地を選び、従来から研究協力関係にある地元大学の応援を得て集中して現地調査を行うことを計画した。実際の調査にあたっては全体を統括する研究代表者に加え、調査対象地にもっとも詳しく、ネットワークをもった年度プロジェクト運営責任者を置くことにし、事後調査が必要な場合は年度プロジェクト運営責任者があたることとした。

計画はおおむね順調に進み、ベトナム国家大の協力を受けたベトナムにおける調査もダラットを中心に継続的に実施され、同様にマラヤ大の援助を受けたキャメロンハイランドを中心とするマレーシアのヒルステーション調査も継続的に行われた。

4. 研究成果

ヒルステーションは広範で多様な研究対象である。本研究では従来の研究成果を基盤にして、ヒルステーションの現状分析に対し、目的を絞りコンパクトな研究計画でアプローチしている。本研究で明らかにしたのは以

下の諸点である。

(1) 擬似ヒルステーション概念の明確化

植民地期に成立したヒルステーションに対し、同様に疑似西欧的景観を持ちながら日本、中国など植民地以外に成立した高原避暑地、あるいは第2次大戦後に独立した旧植民地に成立した同様の空間を擬似ヒルステーションとして規定し、キリロム(カンボジア)などの実例を調査することで、その性格と存立基盤を明らかにした。その結果、ヒルステーション研究が始まって以来の懸案であったヒルステーション概念の範囲を明確にする基準が確立され、同時に植民地主義がヒルステーションに与えた影響、植民地主義が旧植民地に残した影響が定式化された。

(2) 国内観光の伸張にともなうヒルステーションの性格変化

南アジア、東南アジア諸国などかつての植民地の多くは、現在経済の成長期にあり、国民所得の増加にともなう国内観光が急速に伸長している。これにともなうヒルステーションへの主要来訪者も、旧宗主国からの「ノスタルジックツアー」に替わり国内観光客が主体になりつつある。国内観光の中でヒルステーションは特殊なイメージを持った特別な観光地として位置づけられる例が多い。研究ではナイニタール(インド)、ダラット(ベトナム)、フレーザーズヒル(マレーシア)などにおける調査を通じて、国内観光客がヒルステーションを旅行先としてどのように位置づけ、どのような観光行動を行うかを明らかにした。さらに需要の主体が変化することで、ヒルステーション自体がどのように変化しつつあるかも明らかとなった。

(3) 国民によるヒルステーションの「取り戻し」

ヒルステーションは植民地主義の所産であり、新興国民国家にとっては他者のヘリテージである。(2)で論じた国内観光の急成長は、他者のヘリテージであるヒルステーション

を国民国家の側に「取り戻す」行為を生み出す。この傾向は概念的には理解されていたが、「取り戻し」の具体的な実態が論じられたことはない。本研究では対象となった様々な事例から、「取り戻し」の実態が定式化された。これは植民地期から新興国民国家の大衆観光へのミクロ分析に寄与するばかりでなく、より広く観光のポストコロニアル状況における植民地ヘリテージの位置づけを考える上で重要な貢献とすることが出来よう。

(4) 観光のグローバル化に対応したヒルステーションの変容

国内観光の急成長に起因して、ヒルステーションの入り込みの主体は国内観光客に変化している。しかしこれはヒルステーションにおける海外観光客の重要性の低下を意味してはいない。キャメロンハイランド(マレーシア)における日本人リタイアメントコミュニティ、ヌワラエリヤ(スリランカ)におけるアラブ人観光客の急増などの事例を分析することで、ヒルステーション成立を支えた気候など物理的条件が、グローバル化する観光の中で別の意味を持ちつつあることが明らかになった。これは観光における流動を考える上で、新たな視点を付け加える貢献であると考えられる。

上記(1)～(4)を通じて植民地期から続く文化遺産を中心とする観光地が、現代観光の中でいかに位置づけられていくのかを分析する基本的枠組みの整理という、初期の目的を十分達成できたと考えている。

同時に新興国における国内観光の急成長の影響、グローバル化する観光の下で生じる気候条件を求める新しい「人の移動」の様態も明らかになっており、今後の研究課題として大きな意味を持つと考えることが出来よう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 10 件)

稲垣 勉、ヒルステーションのグローバル化と気候条件-ヌワラエリヤを事例に、立教大学観光学部紀要、査読無、16 巻、2014、64-73

https://rikkyo.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=9104&item_no=1&attribute_id=18&file_no=1

大橋 健一、社会主義体制下における観光開発の展開とヒルステーションの意味-ベトナム・ダラットの事例-、グローバル化の中のリゾート地域に関する総合的研究 2、査読無、印刷中、2014、印刷中

白坂 蕃、インペリアル・ベルヴェデーレ(翻訳 原著 Aiken, Robert S, *Imperial Belvederes: The Hill Stations of Malaya*, Oxford UP 1994)、グローバル化の中のリゾート地域に関する総合的研究 2、査読無、印刷中、2014、印刷中

稲垣 勉、擬似ヒルステーションの概念規定と国民化の様態、立教大学観光学部紀要、査読無、14 巻、2012、133-142
<http://id.nii.ac.jp/1062/00006323/>

〔学会発表〕(計 1 件)

INAGAKI Tsutomu、Understanding the Making of Multi-cultural Communities: An Example from Hill Society in Northern Thailand、International Symposium on "Thailand-Japan Cooperation in the Era of Multicultural Society"(招待講演)、Institute of East Asian Studies, Thammasat University (Thailand)、2011 年8月19日

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

稲垣 勉 (INAGAKI, Tsutomu)
立教大学・観光学部・教授
研究者番号：10151573

(2) 研究分担者

大橋 健一 (OHASHI, Kenichi)
立教大学・観光学部・教授
研究者番号：70269281

白坂 蕃 (SHIRASAKA, Shigeru)
帝京大学・経済学部・教授
研究者番号：40014790

(3) 連携研究者
なし